

た  
。 私 キ 焦 て ほ 戰 た れ 夏 こ く ニ 字 大  
祖 は ま け ん の ほん 戰 と 命 に 行 と と 言 き  
父 祖 せん 七 行 争 い 行 う 戰 が 戰 一 見 く  
は 父 し 十 年 镇 鎮 は ジ 戰 争 ヨ と 話 題  
な に ま 年 前 魂 魂 り 分 ジ ジ 見 ト  
か 初 し 前 と 者 日 本 に ト 題 に  
な め た と 新 納 う ト ト ト 何 な  
か て 戰 年 和 い 花 ふ ト ト ト ト  
話 を 事 和 い 火 大 ト ト ト ト  
し の 実 に い 木 会 ト ト ト ト  
ま 在 か か ト 事 事 ト ト ト ト  
せ 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
ん じ 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
で 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
し 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
た 体 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
か と 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
ま と 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
か ま と 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
ま し て 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト

た  
。 私 キ 焦 て ほ 戰 た れ 夏 こ く ニ 字 大  
祖 は ま け ん の ほん 戰 と 命 に 行 と と 言 き  
父 祖 せん 七 行 争 い 行 う 戰 が 戰 一 見 く  
は 父 し 十 年 镇 鎮 は ジ 戰 争 ヨ と 話 題  
な に ま 年 前 魂 魂 り 分 ジ ジ 見 ト  
か 初 し 前 と 新 納 い 花 ふ ト ト ト ト  
な め た と 和 い 火 大 ト ト ト ト  
か て 戰 年 和 い 木 会 ト ト ト ト  
話 を 事 和 い 事 事 ト ト ト ト  
し の 実 に い 事 事 ト ト ト ト  
ま 在 か か ト 事 事 ト ト ト ト  
せ 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
ん じ 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
で 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
し 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
た 体 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
か と 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
ま と 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
か ま と 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト  
ま し て 街 全 信 信 か い 事 事 ト ト ト ト

射水市立新湊中学校

思	平	る	知	し	れ	え	ま	の	今	の	の	思	負	少
い	和	こ	る	だ	た	か	せん	下	で	も	表	と	ら	し
ま	な	と	こ	こ	。	か	ん	。	も	情	に	い	て	し
す	今	が	と	今	。	今	が	。	辛	と	ま	出	と	し
.	の	入	切	そ	。	變	入	。	く	た	し	さ	と	て
	時	切	そ	そ		戰	切		悲	。	て	く	必	か
	代	だ	レ	そ		後	だ		私	。	く	く	死	ら
	に	と	て	、		後	と		は	も	し	逃	で	静
	生	思	平	過		七	十		驚	と	く	げ	く	か
	ま	い	和	去		年	年		き	そ	ま	ま	と	ば
	れ	ま	の	の		続	の		、	し	で	悲	。	口
	た	す	尊	悲		味	意		、	て	見	た	。	を
	木	。	や	レ		い	味		、	決	た	顔	。	き
	木	テ	を	い		る	は		、	後	。	祖	た	開
	の	ラ	み	事		と	ま		、	七	。	父	こ	ま
	の	ス	ん	哭		記	だ		、	十	。	は	と	き
	彼	る	な	を		事	本		、	年	。	当	、	ま
	目	こ	で	正		に	の		、	近	。	時	、	さ
	だ	と	考	し		あ	和		、	く	。	々	、	い
	と	が	え	く		り	分		、	経	。	な	、	弟
						ま	カ		、	た	。	い	。	妹
						ガ	リ		、	父	。	と	、	空
						マ	リ		、	た	。	話	、	裏
						シ	マ		、	。	。	。	、	。
						。	。		、	。	。	。	。	。

# 日本の平和 大丈夫か

## 集団的自衛権行使容認



首相会見のテレビ中継を見る人たち=1日午後6時14分、JR富山駅

### 県民 賛否分かれ

集団的自衛権の行使容認に向けた憲法解釈変更が閣議決定された1日、県民の賛否は大きく割れた。戦後70年近く続いた平和が失われかねないと危惧する声がある一方、相次ぐ中国の領海侵犯を受け「当然」とする声も。双方の主張が平行線をたどる中、日本の安全保障は未知の領域に踏み込もうとしている。

## 「当たり前」の声も

いた人からは「説明が足りない」との声が漏れた。戦争を知る世代に懸念が広がっている。4月に解散した県傷痍軍人会で最後の会長を務めた丹保重高さん(90)は、「近い平和が続いているのは9条のおかげ」と話す。

丹保さんは1945年8月2日、富山大空襲で不発弾の直撃を受け、左足の切断を余儀なくされた。自身は九死一生を得たが同じ頃、フィリピンに出兵した多くの友人・知人が戦死。「どんな理由であれ武力を使えば戦争になりかねない」と心配した。

一方、中国の領海侵犯や北朝鮮のミサイルなどの脅威を訴え、集団的自衛権こそが「抑止力になる」との指摘も聞かれた。「主権国家及び憲法改正を推進する地方議員連盟」

の会長を務める中川忠昭県議(64)=富山市中川原)=は、解釈改憲による集団的自衛権行使容認について「東アジアの緊迫した現状を直視するならば、遅すぎたくらい」と指摘。戦後の長い年月の中で薄れてしまった「日本の国は自分たちが守る」という当たり前の考え方を今一度国民が理解する必要があると言う。

一方、中国の領海侵犯や北朝鮮のミサイルなどの脅威を訴え、集団的自衛権こそが「抑止力になる」との指摘も聞かれた。「主権国家及び憲法改正を推進する地方議員連盟」

の会長を務める中川忠昭県議(64)=富山市中川原)=は、解釈改憲による集団的自衛権行使容認について「東アジアの緊迫した現状を直視するならば、遅すぎたくらい」と指摘。政権による憲法の解釈変更是「絶対悪」ではないとしながらも「憲法には国会や内閣といった多数決の暴走を防ぐ重要な役割がある」。集団的自衛権は独立国家に認められた特有の権利とした上で、「憲法改正について国民に問うべきだ」と語った。

高岡法科大の高乘智之准教

授(憲法学)は「権力者の都

合で憲法解釈を変えるのは好ましくない」と指摘する。



### 「戦争のために憲法を壊すな」

旧制富山中学時代に終戦を迎えた県歌人連盟名誉会長の久泉迪雄さん(86)=富山市山室=も憲法9条の堅持を訴える。現憲法が米国に押し付けられたという見方に強く異を唱え、「9条がある現憲法こそ、日本の進む道だと受け止めている当時の覚悟を忘れていいのか」と語気を強めた。

NGO「アジア子どもの夢」代表、川渕映子さん(64)=富山市森住町=は「なし崩し的に若者を戦争に送り出す国になっていくのが怖い」と言う。1974年から1年間、ベトナム戦争下のサイゴン(現ホーチミン)でつくる「軍事費削減などを実現する「軍事

の充実を、国民大運動県実行委員会

集団的自衛権行使容認の反対を訴える参加者

C.I.C前広場周辺

県集会の実行委は抗議の緊急声明

北日本新聞社は1日、政府

が従来の憲法解釈を変更し、集団的自衛権の行使容認を閣議決定したことを探る号外

を発行した。

本社が号外発行

北日本新聞社は1日、政府

が従来の憲法解釈を変更し、集団的自衛権の行使容認を閣議決定したことを探る号外

を発行した。

行委員会は1日、富山市のC.I.C前広場で集団的自衛権行使容認の閣議決定阻止と秘密保護法の廃止を訴えた。

構成団体や市民ら約80人が参加。同委員会の増川利博代表委員が「政府は戦争をしない国として日本をアピールし、国民の安全を守るべき」とあいさつした。参加者は「戦争のために憲法を壊すな」「平和憲法を守れ」とシテプレヒコールを上げながら行進した。

署名が集まつた。国民は戦争を望んでいない」と訴えた。

県平和運動センターなどでつくる緊急富山県集会の実行委員会が1日、県庁で会見し、集団的自衛権の行使容認に抗議する緊急声明を発表した。

県内の文化人や大学教授ら22人が呼び掛け人となり、元小杉町長の土井由三さんや同センターの山崎彰議長ら4人が出席した。土井さんは「政府の想定問答では自衛隊の多国籍軍への参戦を可能にしている」と指摘。山崎議長は